

---

# 椿のとげ

谷口咲来

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

椿のとげ

### 【Nコード】

N5809D

### 【作者名】

谷口咲来

### 【あらすじ】

『私の王子様になってください』これが君と初めて交わした言葉だった。正直最初は理解不能で戸惑った。でも、あの日初めて君と出会った時から俺の心臓は狂ったように高鳴り続けているんだ。

… 姫様の約束と祈りと、運命は静かに動き初めようとしていた。

〈 have a dream 〉

… むかし昔。

あるところにそれはそれは美しい娘が誕生した。

誰もがその美しさに目を見張り、成長していくにつれてその心の美しさにも誰もがため息をついた。

草や木、花。

虫も動物も、人間も。

なんだつて彼女は愛していた。

それは優しい心があつてこそその大きな愛だった。

そして、彼女は年頃になり沢山の異性に愛された。

たくさん求められるが答える事は出来ない。

全てを愛す

それは彼女の生きる意味

でも、そんなことは誰にも出来ないという事を悟り始めた。

そんな時ある男性が

『僕と結婚してくれないと飛び降りる！』

と、彼女に迫った。

彼の勝手な勘違い。

だけど、勘違いさせたのは彼女だ。

悩み悩んでも答えは出せなかった。

正直に本当のことを伝えようと、彼は心底傷ついた顔をして足を踏み外し落ちて行った。

その時彼女は心を失った。

いつの間にか、暗くて狭い部屋の中で暮らし、ただ時が過ぎるのを耐えていた。

だから、部屋にある小さな窓から見える空が彼女のすべてだった。

そして、彼女は月に魅入った。

美しい月夜には歌を口ずさんだ。

そして、2年の月日が経ったある日。

その日も美しい月夜で彼女は歌を口ずさむ。

その時、窓から男の手が伸びた。

あまりに急なことに驚く。でも、この屋敷の者が此処に来るはずもない。

侵入者だと気付くが、助けを求めることは出来なかった。

何故なら

（ ココ ニ ワタシ ヲ タスケ テ クレル ヒト ハ イナ  
イ カラ ）

思考が止まるのを感じる。

そして、人の気配      ！？

前には男の姿があつた。

この小さな窓から入れるわけもない。  
呆然と月の光で顔の見えない彼を見ていた。

「オマエハココカラデタクハナイノカ？」

急に口を開いた彼は片言の言葉だ。

無性に腹が立つた。

「      出たいわ！それでも私は罪を重ねたくはない！もう二度と  
あんな事は      ツ！！！！！」

私は何故こんなむきになっているのだろうか？

「ナラバ、オレトコイ。」

「？何を言って…」

「クルノカ、コナイノカ。ドツチダ。」

その二択は、これから人生を決めるものへと変わった。  
行かなければ、きっと死ぬまで此処から出ることは出来ないだろう。

だが、変わらない毎日が約束される。

もし着いて行けば、全く違う世界へ連れて行かれ、安全な毎日からはから掛け離れることだろう。

だが、私の生涯がこの小さな窓の世界だけではないのは約束される。

なら、私は…

「行くわ。私を連れて行って下さい！」

顔の见えない彼がフツと微笑んだ気がした。

「キマリダ。ギシキガヒツヨウダ。」

近くにやって来る足音。

コツン コツン コツン

彼女の頬に手を伸ばす。

軽く上を向かせ

「ッ！ん 何を、して、ンン！」

彼は彼女の首筋に噛み付き、口を押さえた。

「オトナシクシテイロ。スグオワル。」

何がすぐ終わるのだ。

痛みに耐えながら、首筋から伝わる熱いものが身体全体に行き届くと首筋にある彼の口が離される。

「コレデオマエモオレトオナジモノニナッタ。」



「どういことですか!？」

怪訝を隠し切れずに眉間に皺を寄せる。

「バンパイア　イヤ。キュウケツキダ」

「キュウケツキって…え？」

「今日はここまでです」

「えゝゝえ！なんでエ」

「というより、これ以上はわからないですよ。」

「……………ねえ。これは、ダレの話なの？お母さん」

「さあ…昔ばなしだから本当のお話ではないのかもしれませんがね」

遠い目でしている。

「このお話。誰も知らないのよ」

「まあ、そうなのですか」

穏やかに笑うその姿は、お母さんが崇める聖母マリア様と同じ顔だ  
と思う。

「でもこれは母さんにとっても大事なお話だから、貴方が本当に大  
切な人にだけしか教えないで欲しいわ」

「うん」

本当言つと今の話も聞いたことがある。この話の続きも。

いつからか、母の記憶の時間が少しずつ短くなることがわかった。

最初は小さな物忘れが続き、いつもの買い物に行つて迷子になった。

そして記憶がどこかで止まったまま少しずつ記憶をなくしていった。

今はもう 5時間くらいしかその日の記憶を覚えていられない。

いつしか私を見て急に大きくなったと驚いた。

お母さんの中の私は何歳？

いつか私の名前を呼ばなくなるかもしれないの？

「キ」

「先行っちゃいますよ」

それでも、今がある。

「もうい  
……」

「ありガト。さ、ヨ  
」

「かアサン？

「あれ？」

・・・夢みた？

久しぶりに見たかも…

ずいぶん、生々しく覚えている夢だ。

それに自分が全く違う人物だった。しかも、女の子

誰だったのだろう…

はたと気付くと、8時半。後30分で遅刻だ。

俺は、東条哉斗。

歳は16。高1だ。

顔はまあ普通。キモくて困った事はないからな。

だけど女は苦手だ。色んな事があって…だからといって、困る事もないから充実はしている。

「行ってくる！」

「「「いつてらっしゃあい」「」」

3つ子の妹達。

どうも俺に懐いてくるから素直に可愛いと思える。  
(待て。シスコンじゃないぞ)

だけど……

「顔洗った？」

「おう」

「ご飯食べなくて大丈夫？」

「ああ」

「ネクタイ忘れてるよ？」

「ハッ！？それを先に言え！」

クスクスクスクス

こういう所はやっぱり女だと思う。

わけもなく、からかう所が・・・はっきり言ってめんどくさい。

「哉斗クン 遅刻だよ？」

「マジっ！？やばい！」

「「「いつてらあ」「」」

チヨット睨んで

ガチャッ・・・ボタン

「今日も最後はシカトだね。琉夷<sup>ルイ</sup>」

「やっぱり、今日も女が苦手みたい。哉斗クン。ねッ琉明<sup>ルア</sup>？」

「うん。でも、これでまだ彼女作らないでしょう。哉斗クンは私達のだもん。でしょッ 琉生<sup>ルウ</sup>」

「だね」

彼の言う可愛い妹達がこんな事を考えているとは知る由もない。

ガラッ

一斉に視線が集まる。

これはいつものことだ。

「哉斗お！やったな、まだ来てねえぞ。」

橘 慶妬<sup>ケイト</sup>

俺の 友人(?) かな。やたらと構って来て、今じゃ一番一緒にいる仲だ。

「やったッ」



『キャーーーーーッ!!!!!!』

『哉斗様が笑っていらっしやいますう涙』

『嬉し過ぎるわあ』

ハア

深いため息をつく。

それに気付くと、いつの間にか静まり返っている。

お嬢様共はそういう弁えはちゃんとしてくれてかなり助かっている。

中学は……いや。

この私立は超エリート学校で一般で受かる確率は無に等しい。（自慢ではないが、一般入学は俺一人だ）  
だからというわけでもないが、周りは皆金持ちばっかだ。

でも、様呼ばわりは勘弁してほしいのが本音だ。

今日も何も変わらない1日だろうと、席から窓を眺めながら思った。

いい天気だな  
：

今は、桜が舞う季節

〈 have a dream 〉（後書き）

ありがとうございました。どうでしたでしょうか？この話はこれからラブストーリーを元に違う路線もちらほらと出していきますので、ご了承ください。主人公は一応男の子のつもりですが、女の子を中心とした話です。女の子は運命に翻弄されながら抗いながら精一杯恋して生きている。そんな素敵な女の子を描きたいと思います。続きもお楽しみに。

## 《 encounter 》

「うわぁ」

満開の桜並木。  
ピンクの花びらが舞う。

「キレイ…」

「姫？」

「先にパパの所に行つてて、  
紀志<sup>キシ</sup>」

「・・・何言つてんの？」

「ちょっとだけだから」

大きな碧い目で見つめる。

そんな目で言われたら無理だつて。

ハア…

諦めて、大きくため息をつく。

すぐに理解したらしく

「ありがとう」

と、彼女は頬に口づけして駆け出した。

長い黒髪が風になびいて手が届きそうになった。

ハア…

また、大きくため息をつく。

「俺やっぱ、向いてねえよ。これ」

彼女が駆け出した方に目を向けるが、もう姿は見えなかった。

カラァン…カラァン…

ベルが鳴る音がする。

授業の終了が意味だ。

「限界」

立ち上がるとヨロっとふらつく。

「東条君、大丈夫ですか？」

心配げに話しかけたのは、同じクラスの戸田奈々子だ。

哉斗は漠然と級長は大変だな、と思った。

「奈々子 哉斗君は眠いだけ。でしょ？」

「け、慶妬！」

彼女と慶妬は古くからの幼なじみだそうだ。

それにしても、話に割って入るのが好きな奴だ。

「ああ、戸田さん、俺は大丈夫だから」

そう言うと、カアと顔を赤くしてハハッと笑った。

「そっか…良かったです」

何故か照れくさそうに言って、自席に戻っていった。

「哉斗ってさあ、全く女の子理解してないね」

しみじみ言うつこいつにイラッとした。

理解してないことには反論するつもりはない。

「でも、今のとそれと何が関係あんだよ。」

「ああいうときは『ありがとう』ってイ……」

途中から声が遠くなる。

あ ヤバ……眠いや。

「ん……ああ、そうだな」

「エッ……！！……め、珍しいな、戦闘」

「そうかな ごめん。」

「エッ エッ……！！……！！……！！」

驚きを隠せないと、言う顔でまじまじと戦闘の顔を見る。

「わかった。もういいから行ってこい」

「ああ じゃあ、サボるけど、ノート頼むな。」

そして、戦闘はふらつく足取りで教室を出て行った。

あんな戦闘初めて見た。素直過ぎて逆に気持ち悪い。



ブルツ…と、体を震わせると慶妬の視線が彼女を捕らえる。

奈々子……

彼女は哉斗が出て行ったドアを見つめていた。

頬はピンクに染まっていて、すごく愛らしかった。

ずっと一緒だったのに、何で俺だけこんな…

眠い…

とにかく寝れる場所…

あの桜の木まで…

昨日の長い夢のせいで、何度も起きたりと寝付けずにいたからだ。

また、哉斗はいつも早寝早起きである。（オイ！言わなくていいだろ、それ！！！）

「……やっと寝れる。」

目の前には大きな桜の木があった。

「こんな道歩いたの初めて」

どこまでも続く桃色の道。

ピンクの花びらは雨のように降り続けているのにどの木も満開だ。

「あれ？」

道の脇に、小さな抜け道があった。

行ってみちゃう？

行く！

こういうのは、どうしても興味がそそられるのだ。

舗装されていない道なので、雑草や木が無造作に生えていて迷ってしまっ  
まいそうだった。

底の高いブーツで草に引っ掛って何度か足がもつれそうになる。

帰ろうかな……そう思い始めていたときに、

「わぁ

すっごくきれえ」

道の先には、小さな広場にそれはそれは大きな桜の木が1本立っていた。

桜並木とは比べ物にならない大きな樹だ。

草木は近寄れないかのように、小さな円を作って取り囲んでいる。

何故か魔法がかかったかのように風が吹いても花びらは散らず、まるで別世界。

彼女は近くに歩み寄ると太い幹に触れた。

大人5人が手を伸ばしても足りなそうだ。

「私は、あなたに会えたことに感謝するわ」

そう言って、幹に口付けをした。

彼女の敬愛の意味だ。

そして、その木の周りを回っていると、

「きゃっ！」

何かに足が引つ掛けて倒れこむと、下には人がいた。

「す、すみません!」

すぐに身体を起こして、ちゃんと見ると、それは……

『お、おお、お、男!?』

やばいわ。私。逃げなきゃ!!!!!!!!!!

彼女は男性恐怖症だった。

しかし、そのせいか身体が硬直して動けない。

でも、まだ起き上がっただけで、彼にもたれかかっている状態のままなのだ。

「う　　ん……ん」

顔は手で覆っていて見えないが苦しげに聞こえる。夢に魘されているようだ。

彼女は彼の様子を見て少し考え込む。

「よし」

思い立って、立ち上がると彼の横に座る。

恐る恐る胸の上にある手を取って、自分の両手で包み込んだ。

いつも自分がしてもらったように

「大丈夫です　そばにいますよ」

手を自分の元に寄せて祈るように目を閉じて強く握った。

「・・・・・・・・キ」

「え……？」

「ツバ、キ……？」

「わ、私の名前……？」

理解不可能。摩訶不思議。意味不明。

彼の夢の中に自分があるなんてありえないよね。

もしかしたら、同じ名前の知り合いがいたりするのかも……

でも、最後に行き着くのは…

顔が紅くなってるのを感じた。

ねえ　ママ？

これがママの言ってた

“運命を感じる”

ってことなのかな？

手が暖かい。握られ……

目を薄っすらと開くと桜が見えた。

まだ、ぼーっとする頭で右手が握られてるのがわかった。

顔を覆っている左手を退かすと、哉斗は眼を見開いた。

「誰……？」

そこには、女が自分の手を握っていた。

一瞬で今まで会った女の中で一番綺麗だと思った。

長い黒髪で真っ白の肌、顔の整った碧眼。

哉斗は驚きを隠せないでいた。

「え……と」

また、女も驚きを隠せないでいるようで、瞳を大きくして顔がほんのり紅くなっていた。

「あの…手、放して？」

自分より年下であろう女に気を使っている自分が可笑しく思う。

「あ、ごめんなさい！」

慌てて放された手がなんだか名残惜しく感じられるのはなぜだろう。

「いや…別に。とっ…「あ！あの」

「…何？」



言葉を搾り出すかのように口をパクパクして、やっと出てきた言葉は、

「私の、王子様になってください!」

「はっ……?」

予想外とするものだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5809d/>

---

椿のとげ

2010年12月12日21時04分発行